

紙幣の役割が終わる時

ジャーナリスト 海部 隆太郎



来年夏に日本銀行券が改刷される。20年前に現在の紙幣を手にしたときは、少しだけワクワクする気持ちがあった。だが、今回はどうしても同じような感覚にならず、新デザインに「いいね」をスタンブする気もない。前は朝一番で銀行へ両替に行き、同僚や家族に見せて楽しんだが、そのような行動をとることはないだろう。

もともと財布の中身は今も昔も少額しか入っていない。これだけは不変なのだが、新札の登場とは無関係な話と言ふなけれ。昔と違うのは日々の買い物での支払いだ。キャッシュレス化が普通になり、むしろ現金を持つことが煩わしくさえ感じ始めている。財布から現金が無くならず、補充する必要も

ないので薄いままの状態が続く。それでもATMで現金を引き出すことはある。その資金使途は友人との飲み会のとかがほとんどで、割り勘のためには現金が必要となるから。その回数も極端に減ってきていることは寂しい限りだ。

最近のニュースでよく取り上げられているのが、国立印刷局が新日銀券の印刷で大忙しだというニュース。新札発行の最大の目的は偽造防止だと強調し、そのほかにもタンス預金をあぶり出す狙いもあると付け加える。家の中にしまい込んだ旧札を新札に交換する際、一定額が消費に向かうのではないかという。本当にそうなのか疑義がある。

タンス預金は是非か

エコノミストらが指摘しているタンス預金の根拠は、日銀の資金循環統計からの推計。2022年の資料では、家計における資金分析で現金・預金は1091兆円。このうち現金が109兆円あり、その半分がタンス預金と見られるという。もう少し詳しい根拠が示されればいいのだが、50兆円は家庭の中で保管されているというこ

とらしい。一定額を家に置いておかないと気が済まない人がいる。銀行が破綻すれば1000万円までしか保護されないし、お金を金融機関にすべて預けてしまうと、公的な部門に財産を把握されてしまうかもしれないとの懸念や、相続税対策として家に大金を保管する人もいとわれている。別な理由で現金を家に置く人もいるだろう。それぞれ理由はさまざまだが、好ましいとは思えない。防犯面から見れば、アポ電強盗など許しがた

犯罪を誘発する危険があることは間違いない。

このように考えるとタンス預金を肯定できる要素はなさそう。個人の自由ではあるが税逃れなどであれば許しがたい行為になる。タンス預金をしたくてもできない者のひがみかもしれないが。

いずれにせよ、デジタル通貨の研究が本格化しており、キャッシュレス社会と相まって、現金紙幣の存在価値は薄れていく方向にあることは断言できる。膨らんだ財布を持たないと気が済まない人は考え方を改める時期に来ている。新札の発行は今回が最後になるのでは、とは言い過ぎだろうか。

【筆者紹介】

海部隆太郎

(かいべりゅうたろう)

法政大学卒。日本工業新聞社、IT企業を経てフリー。中小企業を中心に企業が抱える幅広い課題の取材・執筆活動を展開する。

